

KONAN UNIVERSITY

山部赤人「不尽山を望む歌」について

| | |
|-----|---|
| 著者 | 廣川 晶輝 |
| 雑誌名 | 甲南大學紀要．文学編 |
| 号 | 169 |
| ページ | 一-十 |
| 発行年 | 2019-03-30 |
| URL | http://doi.org/10.14990/00003249 |

山部赤人「不尽山を望む歌」について

廣 川 晶 輝

一 はじめに

本稿は、山部赤人の「不尽山を望む歌」〔万葉集〕巻3・317~318を考察の対象とする。まずは、その作品を掲げよう。

山部宿祢赤人望_二不尽山_一歌一首并短歌

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 不尽の高嶺を 天の
原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も
い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不
尽の高嶺は (3・317)

反歌

田児の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける (三
一八)

当該作品に対して、坂本信幸氏「時間・空間・山部赤人」が「設定された空間」と指摘し、内田賢徳氏「山部赤人の時空」が「構図」と指摘したように、当該作品を論じる際には、作品における「空間」がどのように把握され、設定され、構図を成しているかを分析することが肝要であると思われる。そしてその際には、坂本信幸氏「赤人の富士の山」が「長歌反歌は緊密な関係を有して」と指摘するように、当該作品全体の表現分析に基づいての「空間」「設定」「構図」の分析が求められるよう。

本稿は、〈視座〉を分析の切り口として論じる。清水克彦氏「山部赤人論」は、

当該作品の反歌三二八番歌の「うち出でて見れば」に着目し、

時を限定し、しゅんかんにおける雪の光をとらえたがゆえに、その光はいつそ
うかがやきを増し、すぐれた感覚的な美の世界が成立したのである。

と指摘した。この指摘は「時の限定」に要点があるわけだが、その「時の限定」が成される場所として、「田児の浦ゆ うち出でて見れば」と歌う〈視座〉があるわけである。その〈視座〉はどこに求められるかを論じることが勘所を成すと考える。

長歌は「天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 不尽の高嶺を」と歌い出され、「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」と歌い収められることで、不尽山を讃仰すべきことを述べる。この作品の根幹が不尽山への讃仰にあることは動かない。ならば、〈讃仰するための視座〉の確保が肝要となろう。つまり、どこから見ると讃仰において効果が最大となるのか、ということが問題の俎上にのぼるわけである。本稿は、当該作品の表現分析をととして、当該作品における〈讃仰するための視座〉の設定について論じたい。

二 題詞の「望」について

題詞には「望_二不尽山_一」とある。この「望」について考察したい。当該作品の直後に配列され同じく不尽山を歌う高橋虫麻呂作品〔巻3・319~321〕の題詞は「詠_二不尽山_一」であり、詠物の形を取る虫麻呂作品との違いがあるわけである。当該作品の題詞に採られている「望」の字義を求めよう。『毛詩正義』〔国風、衛、河
廣 には、

誰謂河廣、一葦杭之。……誰謂宋遠、跂予望之(箋云、予我也。誰謂宋國遠與。我跂足則、可_レ以望見之。亦踰越也。今我之不_レ往直以義不_レ往耳。非_レ為_レ其遠。……

とある。「一」内は鄭玄の注である。この鄭玄注には、足を爪立てれば「跂」はかかとを上げて爪立つ義、宋国を「望見」することができると述べられている。上代の官人が『詩経』を読む場合はこの鄭玄注本に依拠すべきであったことは周知のことからである。それゆえに、「望」の遠くを見るかす字義を上代の官人は熟知していたと言えよう。次に、『釋名』(卷二、釋姿容第九)には、「望、茫也。遠視茫茫也。」とある。ここでは、「望」が「茫」すなわち遠くひろびろとしていることと関わりと記され、「遠視」と記されることにより、「望」が遠くをひろびろと視る義を持つことの説明となっている。

このように「望」の字義を見定めたうえで、この「望」が漢籍において詩題として用いられている様相を見てみよう(一部、「銘」の題も含む)。初唐の類書『芸文類聚』(8)を見てみよう。

「宋孝武帝齋中望月詩」「梁簡文帝望月詩」「梁孝元帝望江中月影詩」「梁何遜望初月詩」「梁蕭子範望秋月詩」(以上、卷一、天部上、月)。「梁丘遲望雪詩」(卷二、天部下、雪)。「梁劉苞望夕雨詩」(卷二、天部下、雨)。「梁范雲望織女詩」(卷四、歲時部中、七月七日)。「陳徐陵後堂望美人山銘」(卷七、山部上、總載山)。「宋謝靈運登廬山絕頂望諸嶠詩」「又(宋鮑照)登廬山望石門詩」(以上、卷七、山部上、廬山)。「梁江淹望荆山詩」(卷七、山部上、荆山)。「齊謝朓望海詩」「梁劉孝標登郁洲山望海詩」(以上、卷八、水部上、海水)。「梁劉孝綽和太子落日望水詩」(卷八、水部上、江水)。「梁費昶春郊望美人詩」(卷十八、人部二、美婦人)。「又(宋鮑照)齊劉繪入琵琶峽望積布磯詩」「齊謝朓和劉繪琵琶峽望積布磯詩」「梁王僧孺中川長望詩」「梁王筠遊望詩」「梁庾肩吾舟中寒望詩」(以上、卷二十七、人部十一、行旅)。「又(宋謝靈運)東山望海詩」「又(梁簡文帝)薄晚逐涼北樓迴望詩」「梁沈約登高望春詩」「又(梁沈約)秋晨羈怨望海思歸詩」「梁劉孝威登覆舟山望湖北詩」「梁蕭子範東亭極望詩」「梁蕭子雲落日郡西齋望海山詩」「梁吳筠登鍾山譙集望西靜壇詩」「梁庾肩吾登城北望詩」「又(梁庾肩)和晉安王薄晚逐涼北樓迴望詩」「北齊劉逖秋朝野望

詩」「又(陳陰鏗)登武昌岸望詩」「又(陳陰鏗)和侯司空登樓望鄉詩」(以上、卷二十八、人部十二、遊覽)。

など、枚挙にいとまがない。『文選』(卷二七、行旅下)にも、「晚登三山還望京邑」一首 謝玄暉」がある。このように、「望」は、漢籍において詩題を形作って存在していた。

当該作品においても、題詞の「望」が主題として位置づけられていることが明瞭である。左に、万葉集中の題詞における「望」の用例を掲げた。

- ① 天皇登香山望國之時御製歌(1・二題詞)
- ② 和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停長屋原廻望古郷作歌 一書云太上天皇御製(1・七八題詞)
- ③ 但馬皇女薨後穗積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流涕御作歌一首(2・二〇三題詞)
- ④ 山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌(3・三一七當該歌題詞)
- ⑤ 夏四月大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時使超相坂山望見近江海而晚頭還來作歌一首(6・一〇一七題詞)
- ⑥ 至筑紫館遙望本郷懷愴作歌四首(15・三六五二・三六五五題詞)
- ⑦ 海邊望月作歌九首(15・三六五九・三六六七題詞)
- ⑧ 肥前國松浦郡泊嶋亭泊泊之夜遙望海浪各勵旅心作歌七首(15・三六八一・三六八七題詞)
- ⑨ 到對馬嶋淺茅浦泊泊之時不_レ得順風經停五箇日於是瞻望物華各陳_レ勵心作歌三首(15・三六九七・三六九九題詞)
- ⑩ 十二日遊覽布勢水海船泊於多祢灣望見藤花各述懷作歌四首(19・四一九九・四二二二題詞)

このような用例のあり方の中で④の当該赤人作品は、作者名「山部宿禰赤人」の後すぐに「望不盡山歌」とあり、「望」がきわめて主題化されていることを指摘できよう。この点、荷田春満『萬葉集童蒙抄』が早くに、「この望とあるは、高山大仙なれば、尤仰見るの意、かつ眺望の義をもかねての標題也」と指摘していたことが評される。なお、当該作品の題詞を作者山部赤人が付したと述べる根拠は無い。

おそらく編者によって、当該作品が「望」不盡山歌」と記すにふさわしいと理解されて付されたのであろう。

ここにおいて、題詞「望」不盡山歌」における「望」の主題を把握できるのであり、へ讃仰するための視座」の確保を考究する本稿の妥当性が保証されよう。

三 長歌について

(一) 天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き

まず、長歌の歌い出し部分の表現の分析から始めよう。「天地の 分かれし時ゆ 神さびて」というように、神話世界の時間を持ち出して神妙なる様を描き出そうとしている。ここでは、その叙述が「高く貴き」を修飾している歌のあり方に注目すべきであろう。小島憲之氏「萬葉集と中国文学との交流―その概観」¹⁰⁾は、山を「貴」で表現する漢籍の例として、

夫少室作[△]鎮、以峻極[△]而標[△]奇、太華神掌、以削成而称[△]貴。(陳顧野王、虎丘山序、芸文類聚山部所収) (諸傍点すべて小島氏)

を指摘する。右の『芸文類聚』所収の陳顧野王「虎丘山序」のうちの「削成」は、峰が削れるようにそそり立つ高い様相を表しており、その様相を「貴」としている。そして、これらの修飾部「天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き」が一体となつて、次の「駿河なる 不尽の高嶺」へと掛かつてゆく。当該長歌の冒頭は、このように、「不尽の高嶺」の貴いまでの高さが標榜されるわけである。

(二) 駿河なる 不尽の高嶺を 天の原 振り放け見れば

次に、「振り放け見る」を分析したい。万葉集中の「振り放け見る」の用例は次に示すとおりである。「振り放け見る」に傍線を付し、その行為の対象に四角囲みを付した。

div data-bbox="198 108 220 484" data-label="Text">

イ 天の原 振り放け見れば 大君の 御寿は長く 天足らしたり (2・一四

七)

ロ やすみしし 我が大君の 夕されば 見したまふらし 明け来れば 問ひ
たまふらし 神岡の 山の黄葉を 今日もかも 問ひたまはまし 明日も

かも 見したまはまし その山を 振り放け見つつ…… (2・一五九)

ハ ……我が大君 皇子の御門を (二云) 省略 神宮に 装ひまつりて 使はしし 御門の人も 白たへの 麻衣着て 埴安の 御門の原に あかねさす 日のことごと 鹿じもの い這ひ伏しつつ ぬばたまの 夕に至れば 大殿を 振り放け見つつ 鶉なす い這ひもとほり さもらへど さもらひえねば…… (2・一九九)

ニ 天の原 振り放け見れば 白真弓 張りて掛けたり 夜道は良けむ (3・二八九)

ホ 当該歌 (3・三一七)

ヘ 振り放けて 三日月 見れば 一目見し 人の眉引き 思ほゆるかも (6・九九四)

ト 天の原 振り放け見れば 天の川 霧立ち渡る 君は来ぬらし (10・二〇六八)

チ 遠き妹が 振り放け見つつ 偲ふらむ この月の面に 雲なたなびき (11・二四六〇)

リ 我が背子が 振り放け見つつ 嘆くらむ 清き月夜に 雲なたなびき (11・二六六九)

ヌ 我が背子は 待てど来まらず 天の原 振り放け見れば ぬばたまの夜もふけにけり…… (13・三二八〇)

ル 物思はず 道行く行くも 青山を 振り放け見れば つつじ花 にはえ娘子 桜花 栄え娘子…… (13・三三〇五)

ヲ 物思はず 道行く行くも 青山を 振り放け見れば つつじ花 にはえ娘子 桜花 栄え娘子…… (13・三三〇九)

ワ ……泣く我 目かも迷へる 大殿を 振り放け見れば 白たへに 飾り奉りて…… (13・三三二四)

カ 天の原 振り放け見れば 夜そふけにける よしゑやし ひとり寝る夜は 明けば明けぬとも (15・三六六二)

ヨ ……卯の花の にはへる山を よそのみも 振り放け見つつ 近江道に

い行き乗り立ち…… (17・三九七八)

夕 射水川 い行き巡れる 玉くしげ 二上山は 春花の 咲ける盛りに

秋の葉の にはへる時に 出で立ちて 振り放け見れば…… (17・三九八五)

レ ……新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる 片貝川の
清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の 思ひ過ぎめや あり通ひ いや年の
はに よそのみも 振り放け見つつ…… (17・四〇〇〇)

ソ ……行き変はる 年のはごとに 天の原 振り放け見つつ 言ひ継ぎにす
れ (18・四一二五)

ツ ……白塗の 小鈴もゆらに あはせやり 振り放け見つつ 憤る 心の内
を 思ひ延べ 嬉しびながら 枕づく つま屋の内に 鳥座結ひ 据ゑて
そ我が飼ふ 真白斑の鷹 (19・四一五四)

ネ 天地の 遠き初めよ 世間は 常なきものと 語り継ぎ 流らへ来れ 天
の原 振り放け見れば 照る月も 満ち欠けしけり…… (19・四一六〇)

ナ 我が背子と 手携はりて 明け来れば 出で立ち向かひ 夕されば 振り
放け見つつ 思ひ延べ 見和ぎし山に…… (19・四一七七)

ラ 我が面の 忘れもしだは 筑波嶺を 振り放け見つつ 妹は偲はね (20・
四三六七)

当該歌では、「駿河なる 不尽の高嶺を 天の原 振り放け見れば」とある。「駿河なる 不尽の高嶺を」とあるのだから、ここで「振り放け見る」対象がすでに示されている。にもかかわらず、当該歌では、その「駿河なる 不尽の高嶺を」の後に「天の原」が付けられ、「天の原 振り放け見れば」となっている。同じく「天の原」を持っている右のイ、ト、ヌ、カ、ソ、ネでは、その「天の原」が「振り放け見る」対象となっている。当該歌の「天の原」はともすると疊語と捉えられてしまいかもしれない。しかしここは、疊語で片付けてしまおうのではなく、この「天の原」があることの意義を見出すべきであろう。つまり、「天の原」があることにより、対象となっている「駿河なる 不尽の高嶺」が「天の原」にあるかのように捉える働きを帯びるのだ。井上通泰氏『萬葉集新考』は、「このアマノハラフリサケ

ミレバは外の例とは異なり。即外の例なるはアマノハラヲを略したるなれど今はアマノハラニの二を略したるなり」と指摘し、山田孝雄氏『萬葉集講義』も賛同する。ここに、「駿河なる 不尽の高嶺」が「天の原」にあるように捉える働きを見出すべきであろう。そしてこのありようは、不尽山を「高く貴き」と捉えた当該長歌の歌い出しのあり方と軌を一にする。

(三) 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり
時じくそ 雪は降りける

「渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず」について、早く北村季吟『萬葉拾穂抄』は「山の高大をいふ也。史記曰、崑崙^{コンロンハ}日月所^ノ相^ニ避^ニ隱^ニ為^ニ光明^ニ也」といひしたくひにや」と述べ、漢籍の表現からの影響を指摘した。それを受けて契沖『万葉代匠記』(初稿本)は、「史記、大宛列伝賛曰」「司馬長卿子虛賦曰」「謝玄暉敬亭山詩云」というように用例を示し、この部分の叙述が漢籍に依拠することを指摘した。『代匠記』の導きに従い、漢籍の用例にあたってみよう。『史記』⁽¹⁾卷一二三、大宛列傳第六十三には、「太史公曰：禹本紀言『河出崑崙。崑崙其高二千五百餘里，日月所相避隱為光明也。其上有醴泉、瑤池。』」とあり(傍線等すべて原文)、『文選』卷七、司馬長卿「子虛賦」には、「其山則盤紆窮鬱、隆崇畢率。岑峯參差、日月蔽虧。」とあり、『文選』卷二十七、謝玄暉「敬亭山詩一首」には、「茲山互三百里、合沓與雲齊。隱淪既已託、靈異俱然棲。上干蔽白日、下屬帶迴谿。」とある。「白雲も い行きはばかり」については、高松寿夫氏「へ不尽山」の発見―赤人・虫麻呂歌をめぐる⁽¹²⁾」が、『芸文類聚』に載る用例として「崑崙天竦、五岳雲停。」(度肅之「山贊」)を指摘し、さらに、「時じくそ 雪は降りける」についても高松論文が、『芸文類聚』に載る用例として「昼夜蔽日月、冬夏共霜雪。」(謝靈運「登廬山絕頂望諸嶠詩」)などを示す。

当該長歌の「渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける」という叙述では、不尽山のその高さを讃仰することに力が注がれている。そして、このあり方は、この長歌冒頭部が「高く貴き 不尽の高嶺を」で始まり、長歌の終結部が「不尽の高嶺は」で終わり「高嶺」と強調されていることと軌を一にする。しかし、これらの叙述は右に見たとおり、すべ

て漢籍の表現に源を持つとおぼしい。となれば、当該長歌の叙述は、漢籍の表現の撰取に基づきわめて概念的な叙述であると言えよう。こうした概念的な叙述のありようは、前述の「振り放け見れば」においても影を落としていると言える。つまり、「駿河なる 不尽の高嶺を 天の原 振り放け見れば」と歌い、「不尽の高嶺」が「天の原」にあるかのように捉える働きを帯びて、「不尽の高嶺」の高さの標榜に寄与するわけであるが、どこから「振り放け見」ているのか示されていないのである。「振り放け見る」へ視座が明示されていないのである。

しかし、本稿はこのありようを批判するものではない。前掲坂本信幸氏「赤人の富士の山の歌」が「長歌反歌は緊密な関係を有して」と指摘していたことをもう一度想起しよう。ここには、長歌と反歌の役割分担があるのではなからうか。つまり、当該作品において長歌は一身に不尽山の高さの讃仰の役割を担い、「どこから振り放け見る」のかの叙述をあえて欠くようである。そのいわば叙述の空所を反歌が描き出すという役割分担を見出せるのではなからうか。

「振り放け見る」へ視座の在処（ありか）の説明は、すべて反歌に委ねられている。

四 反歌について

では、反歌の表現の分析に移ろう。論述の便宜のために反歌をもう一度掲げる。

田児の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける（三一八）

この反歌では、第三句から第五句において「真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける」というように気付きの「けり」を用いて詠嘆している。反歌における詠嘆の中心がここにあることは動かない。ところで、長歌ですでに「時じくそ 雪は降りける」と歌われているのに、この反歌で再び「不尽の高嶺に 雪は降りける」というように気付きの「けり」を用いて、今気付いて驚いているように歌うのはなぜなのか。感動の表出の機微には、「真白にそ」が関わっていると思われる。

「真」は、『岩波 古語辞典 補訂版』¹³の、

ま「真」：《片^{（た）}》の対。名詞・動詞・形容詞について、揃っている、完全である、本物である、すぐれているなどの意を表わす

という解説を見るまでもなく、また、万葉集中の「真十鏡」の用例を見るまでもなく、「完全」を表すことが明らかだ。となると、当該反歌三一八番歌の「真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける」も、「不尽の高嶺」全体に雪が張り付いており、不尽山の山容全体が白くなっていることが歌われていると捉えることができよう。この点、本稿のこの主張に根拠を与えてくれる用例がある。次の用例である。

悲傷死妻 高橋朝臣作歌一首并短歌

白たへの 袖さし交へて なびき寝し 我が黒髪の 真白髪に なりなむ極み
新た代に 共にあらむと 玉の緒の 絶えじ妹と 結びてし ことは果たさ
ず 思へりし 心は遂げず 白たへの 手本を別れ にきびにし 家ゆも出で
て みどり子の 泣くをも置きて 朝霧の おほになりつつ 山背の 相楽山
の 山のまに 行き過ぎぬれば……（3・四八一）

題詞を見れば、この歌が「亡妻挽歌の系譜」に位置づけられることがわかる。永遠の愛を誓っていたのに妻に先立たれた夫の悲哀が綴られる歌なのであるから、この歌の「我が黒髪の 真白髪に なりなむ極み」は、「夫である私の黒髪が、残すところ無く全て白髪になるまでずっと」の意味となる。すべて白髪になるという意味である。

当該反歌三一八番歌の「真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける」は、「不尽の高嶺」全体に雪が張り付いており不尽山の山容全体が白くなっている様相が歌われていると捉えることができる。不尽の高嶺全体が雪に覆われていることに対する感動がここにあるのである。長歌ですでに「時じくそ 雪は降りける」と歌われているのに、反歌において「不尽の高嶺に 雪は降りける」というように、再び気付きの「けり」を用いて今気付いて驚いているように大仰に歌う理由がここにあると捉えられよう。

さて、そのような全体が雪に白く覆われている「不尽の高嶺」の姿が、当該反歌三一八番歌の作品世界の中に存在することになる。長歌はすでに見たように、「不尽の高嶺」の高さへの讃仰を歌っていた。それに対して反歌の方は、へ真白へへの

讃仰を歌うわけである。

では、山全体が雪に白く覆われている「不尽の高嶺」の姿を讃仰するには、どのような「視座」が必要なのか。「真白」を叙述するに足る視座の確保が成されているわけであるが、当該反歌の作中の叙述の「視座」は、どこに求められるのであろうか。ここで改めて、第二章で述べたように、題詞に提示されている「望」の主題が関連すると言えよう。

山容を見渡すつまり題詞に提示されている「望」を成すことができる「讃仰するための視座」、すなわち「理想の視座」がどこに求められるのかの分析を指摘したい。

そこで、まずは、前掲の清水克彦氏「山部赤人論」の指摘を掲げよう。

赤人作の初二句は、「田兒の浦ゆうち出でて見れば」であり、作者が舟に乗って来たのか、それとも海岸を歩いて来たのかさえあきらかでない。まして、手にまめをつくりながら舟を漕いで来たのか、海岸の砂に足をめりこませて難儀しながら歩いて来たのかは、まったく知るすべもない。赤人はここでも、生活的な叙述をこぼんでいるのである。

この指摘の中の「生活」には、この論文が書かれた一九五六年当時の論述のバラダイムが見えよう。¹⁴ここでは、「作者が舟に乗って来たのか、それとも海岸を歩いて来たのか」の部分を参照したい。

「海岸を歩いて来た」という説に立つ論の嚆矢は、賀茂真淵『萬葉考』（伯耆成道補）である。『考』は、

こはまつ打出て田兒の浦より見れはと心得へし、かく言を上下にして云ふ事、集にも古今哥集にも多し、さて駿河の清見の崎より東へ行は、今さつた坂といふ山の崖の下なるなきさづたひに道有、これ古の大道也、その辺より向ひの伊豆の山もとまての入海を、惣て田兒の浦といへり、かくて右の岸陰を行はつれば、東北へ入たる海のわたの所より、富士の嶺はしめて見ゆ、故に打出て田兒の浦より見れは、てふ心にてかくつ、けたるを知る也、東路のいつこはあれど、こ、にあふき見るにしくはあらず、

と述べ、自説を主張するために右に見るように語順を変えて歌を把握しようとした。

また、上田秋成『檣の杣』は、

此哥は、其荒穢つたひして、山の下めぐり果たれは、こ、を田子浦と云に打出たり。……田子の浦従と書たれは、従とよむへきを、古点に従とよみしか、言は叶へり。目を閉めくらしておもひはかれは、従をにとよみてかなへる詞章あり。さてなん、古人もしかおほして、大かたににとよまれたれと、ゆとよまては叶はさるも有。よく／＼思給へ。

と述べ、「従」を「ゆ」ではなく「に」と訓もうとする。もちろん「ゆとよまては叶はさるも有。よく／＼思給へ。」と留保は設けているが、同じく上田秋成『金砂』では「田子の浦に打出て見れは」と訓み、「田子の浦に出る。」と注解する。この処置は、橘守部『萬葉集檣婦手』でも同様だ。『檣婦手』は、

於田兒之浦の意也。田兒の浦より外へ打出たるには非ず。と述べたのである。

『考』の「こはまつ打出て田兒の浦より見れはと心得へし、かく言を上下にして」というように把握しようとする行為に対しては、山田孝雄氏『萬葉集講義』の、「打出づ」といふ語は上の「田兒浦ユ」より直ちにづくる語遣にして、そより「見る」といふにはあらず。

という的確な批判を当てるべきであろう。『考』の説には従うことができない。また『檣の杣』『金砂』『檣婦手』の処置にも従えない。『講義』が、

「従」は「二」とよむべき字にあらず、……この「ユ」が「より」にして、田兒の浦よりの意なることは明らかと指摘するとおりである。

このようにして、「海岸を歩いて来た」という説は拠り所を失ったと思われるのだが、問題は複雑な様相を呈している。さらに諸説を追ってみよう。一九三七年一月刊行の『講義三』よりも前の一九三四年五月に刊行された『国語・国文』第四巻第五号掲載の吉澤義則氏「萬葉集の和歌の語位破格による試訓」では、

「ゆ」は「より」であるから、当然「見れば」を修飾しなければならぬ。勿論「田子の浦ゆ」は副詞的修飾語だから、その点からいへば、用言である「打出で、」を修飾することも出来るわけであるし、またこの歌を離れて、語と語

との意味の接続から見れば、何ら支障は無いのである。但しこの歌では、さう見るといふと、田子浦から何処へ出たか分らない、従つて何処から富士山を見てゐるか分らなくなる。だから、この歌では、意味の上から見て、「田子の浦ゆ」は「打出で、」を距て、「見れば」を修飾するものとしなければならぬのである。

と述べられている。しかし、「但しこの歌では、さう見るといふと、田子浦から何処へ出たか分らない」から『田子の浦ゆ』は「打出で、」を距て、「見れば」を修飾する」という論述は妥当なのだろうか。これに対しては、澤瀉久孝氏「田児の浦ゆ打出でて見れば」¹⁵⁾における、

「戸口から出て見れば」と「出て戸口から見れば」とは意味が違ふのであるから、歌に語数の制約があるとしても後者の意を表はす為に、語を前後して前者の如くいふ事は無理であらう。

という論述が参照されよう。澤瀉論のこの論述を採り入れて、「田児の浦ゆ」は次の「うち出でて」に掛かると理解すべきである（この「浦ゆうち出でて」という表現については後述する）。もつとも、澤瀉論としては、「田児の浦ゆ」の「ゆ」はそのままにして「田児の浦を」という意味に捉え、

作者は由比、蒲原の浜辺の道を、山かげにそうて歩いてゐたのである。そしてその山かげから打出でて、さへぎるものもない中天に、秀麗な富士の高嶺をうちあふいだ時、おのづからにして「田児の浦ゆ打出でて見れば」の句が成つたのである。

と述べている。

さらに、「山道を歩いて来た」とでも言うべき説に立つ論もある。土橋寛氏『古代歌謡全注釈 古事記編』¹⁶⁾は、古事記歌謡五三「おしてや 難波の埼よ 出で立ちて わが国見れば、淡島 淤能基呂島 檳榔の 島も見ゆ。佐気都島見ゆ。」の条で『万葉集』巻13・三三三八番歌「逢坂を うち出でて見れば 近江の海 白木綿花に 波立ち渡る」を参照し、

「うち出でて」は逢坂山の視界をさえぎられた山道を出る意であり、そこを出た所で眺望が開けて、淡海の海に白木綿花のように立っている波が見えたので

ある。とすれば西のほうから旅を続けて来た赤人は、田子の浦に出るまで、前面の山にさえぎられて富士が見えないという状況にあったと考えなければならぬ。

と述べる。しかし、三三三八番歌の「逢坂を うち出でて見れば」という表現を当該反歌三三八番歌にそのまま反映させることには無理があろう。右の土橋著書の「田子の浦に出るまで」(傍点、廣川)にその無理が顕在化している。当該反歌には「田児の浦ゆ、うち出でて見れば」とある。分析は表現に則してやりたい。

新編日本古典文学全集版『万葉集』も、この「山道を歩いて来た」説に与する。『新全集』は、頭注で二九六番歌の条に載せた地図を参照することを求め、

中世以前の田子ノ浦は興津の東方から由比を経て蒲原^{ばらん}に至る海岸をいう。「うち出でて」は「逢坂をうち出でて見れば」(三三三八)の例もあり、今まで周りに山などの障害物があつて視界が遮られていた所から急に広々とした所に出ることをいう。このユはそれを通しての意。この歌の詠まれた地点について諸説があるが、薩埵^{さつ}岬^{さつ} (九〇^{トル})の鞍部から下りかけた辺りで、正面に金丸^{かなまる}山(蒲原北方の山)越しに富士を仰ぎ、右に駿河湾を眺めて詠んだものであろう。近世以前は薩埵山の東南海岸は通行できず、興津から興津川に沿って北上し、内洞^{うちいづみ}の辺りから薩埵岬を越えて西倉沢の南に出た。

ときわめて実体的に述べる。この『新全集』は、土橋著書と同様に三三三八番歌を援用しようとするが、「このユはそれを通しての意」という案を示して矛盾を打開しようとする。しかし、これでは、「田児の浦ゆ」が「見れば」に掛かることとなり、上述の澤瀉論からの批判は免れ得ないであらう。そしてそもそも、『新全集』の説は「田子の浦」を陸地とせねば成り立たない。

ここは、「浦」の分析・理解を地道に進めるべきである。万葉集中の「浦」の用例を見ると、「(1) 陸地」「(2) 水上」「(3) 陸地・水上両方の余地あり」と一応分類できる。

(1) 陸地

① ……網の浦の 海人娘子らが 焼く塩の 思ひそ燃ゆる 我が下心(1・五)

(2) 水上

② 我が欲りし 野島は見せつ 底深き 阿胡根の浦の 玉ぞ拾はぬ (異伝注記省略) (1・一二)

③ あみの浦に 船乗りすらむ 娘子らが 玉裳の裾に 潮満つらむか (1・四〇)

④ 荒たへの 藤江の浦に すすき釣る 海人とか見らむ 旅行く我を (異伝注記省略) (3・二五二)

⑤ 武庫の浦を 漕ぎ廻る小舟 栗島を そがひに見つつ ともしき小舟 (3・三五八)

(3) 陸地・水上両方の余地あり

⑥ 名寸隅の 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ 海人娘子 ありとは聞けど…… (6・九三五)

①は塩を焼いているのだから水上ではない陸地であると言えよう。一方、②は「底深き 阿胡根の浦」とあるのだから、陸地とは言えず水上である。③は舟に乗っているのだから水上であることが明瞭であり、④もすすきを釣っているのだからこれも水上である。⑤は小舟が漕ぎ巡るのであるから水上である。だが、陸地から水上か述べることにさほど意味の無い例もある。⑥は朝なぎに玉藻を刈ると歌われる。玉藻が生えているのであるから、水中の時がある。しかし、その玉藻を刈る時には陸地となっているわけだ。

こう見てくると、「浦」は、歌の詠まれ方によって陸地なのか水上なのかが変わると言えそうだ。これは、「浦廻 (うらみ)」でも同様で、

⑦ 水伝ふ 磯の浦廻の 石つつじ 茂く咲く道を またも見むかも (2・一八五)

⑧ 軽の池の 浦廻行き廻る 鴨すらに 玉藻の上に ひとり寝なくに (3・三九〇)

を見れば、⑦は石つつじが繁く咲いているのだから陸地を指し、⑧は鴨が行き巡るのであるから水上を指している。浦廻 (うらみ) も陸地と水上の両方の用例があることになる。

当該歌は、「田児の浦ゆ うち出でて見れば」という表現となっているのであるから、「浦ゆ」と「うち出づ」とのかかわりの検討が肝要となる。そのような観点から万葉集中の用例を見てみよう。

イ 葦北の 野坂の浦ゆ 船出^{ふなで}して 水島に行かむ 波立つなゆめ (3・二四六)

ロ 田児の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける (3・三一八 当該歌)

ハ いづくにか 船乗りしけむ 高島の 香取の浦ゆ 漕ぎ出来る船 (7・一一七二)

二 月読の 光を清み 神島の 磯廻の浦ゆ 船出^{ふなで}す 我は (15・三五九九)

右の「浦ゆ」＋「船出^{ふなで}す・うち出づ・漕ぎ出来」の用例を見れば、当該反歌は、「田児の浦から漕ぎ出る」ことが歌われていると素直に捉えられるのではなかろうか。鹿持雅澄『萬葉集古義』が「田児の浦より、沖の方へといふ意なり、……打出^{ウチデ}而見者は、……田児の浦より、海の沖の方へ船漕出で、不尽山を見れば、といふ意なり」と指摘していたとおりであろう。⁽¹⁷⁾

であるのに、なぜ、前掲土橋著書や『新全集』は、先のように捉えたのか。そこには、当該反歌が『新古今和歌集』そして「百人一首」に、

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ (『新古今和歌集』冬歌、六七五)⁽¹⁸⁾

という形で収載されたことが原因として横たわっているのではないかと思量される。この後代のへ読みへに引きずられないようにと身構える意識が強すぎたのではなからうか。そして、もう一つは、実地踏査研究の陥穽に係る「テキストの内と外の問題」が挙げられよう。久米常民氏「萬葉集自然詠詠における仮構性―山部赤人の歌四首」⁽¹⁹⁾は自然を歌う際の「仮構」を指摘する。すなわち、歌人山部赤人の中に、「如何に構えたら、人が美しいと感ずる自然を構成することが出来るかを苦慮していた」様相や、「仮構によって、彼の好みにあう自然に、現実の自然を作りかえようと企図し」ていた様相を見出すのである。この論考は当該作品を考察する際にも参考になろう。また、坂本信幸氏「赤人と自然」⁽²⁰⁾は「自然を自然として見る姿勢と、

それを作品として形象化することには、また別の問題があるのである」と指摘していた。当時の実際の地形と、作品内でどう作品世界が構築されているかとは、そもそも別だ。当該作品の場合、歌が詠まれた場所がある程度明らかであるだけに、具体的に突き詰めたい衝動が諸注釈書・諸論者の中にあつたのではないだろうか。実地踏査研究によってすべてが理解できたように感じてしまう陥穽にもまた、我々は自覚的でなくてはならないと考える。そして、注釈書等に地図が示されたりすると、その陥穽はいっそう深くなってしまう。⁽²¹⁾

思うに、前掲の坂本信幸氏「時間・空間・山部赤人」が当該作品に対して「設定された空間」の所在を指摘し、内田賢徳氏「山部赤人の時空」が「構図」の存在を指摘した業績は、この「実体化の陥穽」「テキストの内と外の問題」への挑戦であつたのではなからうか。

五 まとめ

当該作品の長歌では、不尽山の高さの讃仰に力が注がれている。そして、その長歌の叙述は、漢籍の表現の摂取に基づくきわめて概念的な叙述であつた。「振り放け見れば」と歌つても、どこから「振り放け見る」のかの「視座」が明示されていないのである。前掲坂本信幸氏「赤人の富士の山の歌」の「長歌反歌は緊密な関係を有して」いるという指摘に導きを得れば、長歌と反歌の役割分担というように理解が届く。つまり、当該作品において、長歌は一身に不尽山の高さの讃仰の役割を担い、「どこから振り放け見る」のかの叙述を欠く。当該作品を享受する者（聴く者・読む者）は、そのいわば叙述の空所へ興味を向ける。そしてその空所を反歌が描き出すという役割分担を見出せる。「振り放け見る」〈視座〉の在処（ありか）の説明は、すべて反歌に委ねられているのである。

長歌における讃仰のうちの降雪の要素を引き継いで反歌は歌い出される。長歌ですでに「時じくそ 雪は降りける」と歌われているのに、反歌において、「不尽の高嶺に 雪は降りける」というように気付きの「けり」を用いて、今気付いて驚いているように歌うのであつた。この大仰な感動の表現によって、不尽山への讃仰が

なされるわけであり、ここに、当該歌としての意匠が求められることになろう。本稿の「一 はじめに」に掲げたように、坂本信幸氏「時間・空間・山部赤人」は当該作品に対して「設定された空間」の所在を指摘し、内田賢徳氏「山部赤人の時空」は「構図」の所在を指摘していた。前章で見たように、当該反歌では、田見の浦から漕ぎ出して不尽山を見たことが示されている。この「見る」行為は、題詞に提示されている〈望〉の主題と合致する。山容を見渡して讃仰するための〈理想の視座〉として、洋上の視座が「仮構」されているのである。山部赤人作品における「仮構」の持つ意義については、前掲の久米常民氏「萬葉集自然誦詠における仮構性―山部赤人の歌四首―」を参照したとおりである。前掲『古義』の指摘に対して、『講義』は「田見浦より船に乗りて海上より富士山を詠めたりとする必要は更になし」とだけ述べている。しかし、〈讃仰するための理想の視座〉を得るためには、「必要」だったのである。ところで、我々は、〈理想の視座〉としての「洋上の視座」に対して抵抗が無いはずである。柿本人麻呂「羈旅歌八首」の、

天ぞかる 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ（一本に云ふ「家のあたり見ゆ」）（3・二五五）

には、明石海峡の西側の洋上から「明石の門」を通して故郷大和の懐かしい地が見えると歌われている。ここには確かに「洋上の視座」があるわけである。また、

難波津を 漕ぎ出て見れば 神さぶる 生駒高嶺に 雲そたなびく（20・四三八〇）

という防人歌も参照できる。ここにも確かに「洋上の視座」があるわけである。

前述のように、題詞「山部宿祢赤人望_三不尽山_一歌一首并短歌」は山部赤人自身が付けた確証は無く、おそらく編者の手に拠るものであろう。漢詩の詩題「望〇〇」とつながるこの題詞が付けられたことは、結果として正しい見識に基づくと言える。不尽山を〈望〉することの当該作品における主題を見事に把握しているからである。詩題〈望〉に適う〈讃仰するための理想の視座〉をめぐる当該作品における意匠の存在を指摘してまとめたい。

注

- (1) 本稿は、当該作品の本文を掲出するにあたり、閲覧可能な写本は複製にて確認し閲覧不可能な写本は『校本萬葉集』の記述を参照し本文校訂作業を施している。題詞は校訂作業を施した原文を掲げ、歌は校訂作業を施した原文を基にして新編日本古典文学全集版『萬葉集』(小学館)の書き下しに拠り適宜書き下している。
- (2) 坂本信幸氏「時間・空間・山部赤人」(『国文学 解釈と教材の研究』二八巻七号、一九八三年五月)
- (3) 内田賢徳氏「山部赤人の時空」(『叙説』三七号、坂本教授退休記念、二〇一〇年三月)
- (4) 坂本信幸氏「赤人の富士の山の歌」(『セミナー 万葉の歌人と作品 第七巻 山部赤人・高橋虫麻呂』、二〇〇一年九月、和泉書院)
- (5) 清水克彦氏「山部赤人論」(『萬葉論序説』、一九六〇年一月、青木書店)
- (6) 『毛詩正義』の引用は『十三經注疏』(中文出版社)に拠り、句点・返り点を付した。
- (7) 『釋名』の引用は『漢魏叢書』に拠る。
- (8) 『芸文類聚』の引用は、『藝文類聚』(上海古籍出版社)に拠る。『芸文類聚』について、小島憲之氏「万葉集と中国文学との交流―その概観―」(『上代日本文学と中国文学―出典論を中心とする比較文学的考察―』、一九六四年三月、塙書房)が、万葉集第三期における「表現材のもととなった主要な書籍」と把握したことの意義は大きい。その点、本稿において『芸文類聚』における「望」の詩題としての存在意義を提示することはきわめて重要である。
- (9) 『文選』の引用は、李善注を掲載する『文選』(芸文印書館)に拠り、句点・返り点を付した。以下の『文選』の引用も同じ。
- (10) 小島憲之氏「萬葉集と中国文学との交流―その概観―」(注8に同じ)
- (11) 『史記』の引用は、『史記』(中華書局)に拠る。
- (12) 高松寿夫氏「不尽山」の発見―赤人・虫麻呂歌をめぐる―(『上代和歌史の研究』、二〇〇七年三月、新典社。初出、一九九一年三月)
- (13) 大野晋氏・佐竹昭広氏・前田金五郎氏編『岩波 古語辞典 補訂版』(一九九〇年二月、岩波書店)
- (14) 当該論文掲載の清水克彦氏『萬葉論序説』(前掲)の「あとがき」には、この論考が一九五六年八月に書かれた旨の記述がある。
- (15) 澤瀉久孝氏「田児の浦ゆ打出でて見れば」(『萬葉古径二』、一九七九年三月、中公文庫。初出は一九四一年六月、京都弘文堂書房。同書に「昭和十五年十二月二日稿了」との記述あり)
- (16) 土橋寛氏『古代歌謡全注釈 古事記編』(一九七二年一月、角川書店)
- (17) ほとんどの注釈書が陸上の視座を指摘する中で、佐竹昭広氏・山田英雄氏・工藤力男氏・大谷雅夫氏・山崎福之氏校注、岩波文庫版『万葉集』(二〇一三年一月)は、「田子
- の浦を通して、視界の開けた場所に出ての意に解する」としながらも、『古義』の説を否定せずに紹介している。
- (18) 『新古今和歌集』の引用は、新編日本古典文学全集版『新古今和歌集』に拠る。
- (19) 久米常民氏「萬葉集自然詠における仮構性―山部赤人の歌四首―」(『萬葉集の詠詠歌』、一九六二年七月、塙書房)
- (20) 坂本信幸氏「赤人と自然」(『国文学 解釈と教材の研究』三三巻一、一九八八年一月)
- (21) 廣川晶輝「山部赤人『紀伊国行幸歌』の空間把握について」(『上代文学』一一七号、二〇一六年十一月)。

〔附記〕

本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))「墓誌の表現分析を基盤とした日中韓三方国の文化交流の応用的研究」(課題番号:15K02934)交付による成果に基づく。